

KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

NO.36

神田日勝記念美術館だより



一年を振り返って



神田日勝記念美術館館長

小林 潤

平成の時代が幕を閉じようとしている。平成5年6月にオープンした当館は、まさに平成の時代を皆様と共に歩みを進めてこられたことに改めて感謝したい。

開館以来25年の歩みの中には画家神田日勝の作品収集・保存・展示はもとより、文化・芸術活動の拠点としての美術館のあり様も検討実践してきたと自負しているが、25年という節目にあたり、更なる充実が求められていると認識している。

開館25周年の今年は、記念展《室内風景》を巡る、これまでとこれからとして室内風景を主軸として日勝の画業と当館の歩みを振り返った。

また、道内で活躍される独立展北海道会員展や、鈴木秀明の世界展などベテラン作家による事業と、若いアーティストの展覧会が衆目を集めた。特に第28回道銀芸術文化奨励賞を受賞した若手の冨田美穂の「牛の木版画展」、VOCA展など道内外で活躍する日本画の蒼野甘夏展も好評を博した。

東京学芸大学名誉教授澤崎眞彦氏所蔵の浮世絵コレクション展「音の錦絵 絵師たちの見た洋楽器」も多くのファンを集めた。

5年おきに実施している絵画感想文コンクールではカラフルな作品《画室B》の感想を求めたが、鋭い視点で書き上げられた小中高・一般の作品からは、新たな日勝の世界が浮かび上がるような感覚の

のも多く、全体的に審査員から高い評価をいただくなど、今後も美術鑑賞を通じた情操教育の一環として続けて行きたい。

イベントでは恒例の「第24回蕪壺祭」「第26回馬耕忌」「第16回日勝祭」とも多くのファンが集う時間となったが、偏に友の会皆様のご尽力によるところが大きい。

今年の新成人の皆さんを成人式当日に無料入館ご招待した。館内の落ち着いた雰囲気と希望溢れる新成人の醸し出すエネルギーが融合した新しい感覚の鑑賞機会となった。

他方、アートギャラリー北海道の事業として道立帯広美術館で開催された「神田日勝と道東の画家たち」展は、北海道全体がアートの舞台となる事業の嚆矢ともいえるもので、今後もさまざまなかたちで両館の連携を継続していきたい。

迎える新年度は新たな元号の年であり、4月1日スタートのNHKの朝の連続テレビ小説は記念すべき100話「なつぞら」だが、十勝が舞台でヒロインなつ（広瀬すず）がベニヤ板に素敵な馬の絵を描く少年山田天陽（吉沢亮）に出会うストーリー。山田天陽は神田日勝の人物造形をモデルとしたとされ、当館も注目されている。さらに日勝没後50年に向けた準備の年ともなり、次の四半世紀の第一歩の年として友の会各位・多くのファンのお力添えをいただきつつ歩みを進めて行きたい。



北海道立帯広美術館 学芸課長

光岡 幸治

道立帯広美術館では、昨年、神田日勝記念美術館の全面的な協力を得て「神田日勝と道東の画家たち」展を開催した（9月15日～12月2日）。

当館は、「道東の美術」を作品収集の柱のひとつとし、これまででも十勝を代表する画家として高い評価を確立している神田日勝の作品の収集に努めるとともに、特別展やコレクション・ギャラリーでその作品を継続的に展示・紹介してきた。

しかし、意外なことに当館においてこれまで日勝の作品を包括的に紹介することはなかった。鹿追町に立地する神田日勝記念美術館を訪ればいつでも日勝の画業を一望することができるということもあってか、こうした企画が進まなかったのではないだろうか。今回、日勝の秀作25点を同館のコレクションなどによって紹介できたのも「アートギャラリー北海道」の事業として企画したことによるといえる。

「アートギャラリー北海道」は、公立、私立にかかわらず道内の美術館がネットワークでつながり、北海道全体がアートの舞台となることを目指す取り組みで、現在のところ74館が連携館となっている。所蔵品の貸し借りはもとより、各種イベントやモバイル・スタンプラリーなどさまざまな面での連携を通して、美術文化の一層の振興に寄与しようとする構想である。

「神田日勝と道東の画家たち」展を開催して



本展は、第1章「先駆者たちの足跡」、第2章「神田日勝の秀作群」、第3章「神田日勝と同時代の画家たち」にコーナー分けした。日勝が画家として大きな足跡を残した1960年代の秀作群を核として、十勝の美術史の揺籃期から現代に至るその一断面を検証することを意図しての構成であった。圧倒的な存在感を誇る日勝作品と、彼の同時代の画家たちの作品をあわせて展示することで、十勝においても全国的な美術の動向と軌を一にした多種多様な表現が展開し、そして今日につながっていることをつぶさに見ていただくことができたのではないかと。

今回の展覧会を通して、近隣に立地する美術館のコレクションも異なった展示空間で、視点を変えてみていただけるなど、その秘めた可能性について改めて実感した次第である。なお、本展覧会に先立って、神田日勝記念美術館が1995年から毎年開催している「馬の絵作品展」の受賞作10点を、当館ロビーでサテライト展示によって紹介することができ、また両館の間で半券提示による相互割引も始動した。

こうした連携を今回は神田日勝記念美術館との協働で実現させることができたが、今後も各連携館が「アートギャラリー北海道」事業として、さまざまな取り組みの可能性を模索しつつ実践していくことが期待されている。

第24回 蕪墾祭

2018年6月17日(日)

神田日勝記念美術館・鹿追町民ホール

参加人数：180名

男声合唱団「コール・ブリュエデル」が、当館展示室で半身の馬を背に、「時代」や「なごり雪」など聴きなじみのある曲を中心に、響き渡る低音や伸びのある高音で歌い上げ、観客を魅了しました。

その後の交流会では、ハムやチーズ、手作りの煮物などが参加者に振る舞われました。



第26回 馬耕忌

2018年8月26日(日)

神田日勝記念美術館・鹿追町民ホール

参加人数：112名

当館学芸員のギャラリー・トーク、田中光俊氏の心に沁みるギター、北海道立近代美術館の佐藤幸宏学芸副館長による基調講演「神田日勝《室内風景》考—西洋絵画に見る『座る人物像』をめぐって」が行われました。

最後に国内外でツアーを組み演奏されている野瀬栄進氏による「ジャズピアノコンサート」が行われました。しっとりとした繊細なタッチから打って変わって激しく鍵盤をたたいたり、また、客席からのリクエストに応じて即興演奏をしたりと、多彩な演出で観客を虜にしました。日勝の画業を偲びつつ、心躍る馬耕忌となりました。



第16回 日勝祭

2018年12月8日(土)

鹿追町民ホール・神田日勝記念美術館

参加人数：41名

「時間が生み出す価値“時間”を味方につける！」と題し、安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄館長・磯田憲一氏(元北海道副知事)が講演を行いました。鹿追へ入植してきた日勝について、「厳しい環境を乗り越え、この地にいたからこそ皆の心に焼き付き、価値を持ち続ける。そしてこれからもその価値は高まっていくだろう」と語りました。



芸術鑑賞バスツアー

2018年5月20日(日) 参加人数：31名

札幌市

北海道立近代美術館・北海道立三岸好太郎美術館
「ブリチストン美術館展」

ブリチストン美術館が収蔵する、セザンヌやピカソなどの西洋近代絵画、そして藤田嗣治、岸田劉生などの日本近代の洋画を2会場に渡って堪能しました。



展覧会事業実行委員会主催事業

第85回記念

独立展北海道会員鹿追展

会期:2018年4月15日(日)～4月21日(土)

会場:鹿追町民ホール

【入場無料】 入場者数:95名

主催:神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会・独立美術協会・
独立展北海道展実行委員会
共催:神田日勝記念美術館・神田日勝記念美術館友の会
後援:鹿追町・鹿追町教育委員会

独立展は、1926年に前衛の画家達によって結成された在野の美術団体・独立美術協会による展覧会です。神田日勝も1964年の第32回展から毎年出品しており、本展には深い縁があります。その繋がりから開催された独立展北海道会員鹿追展では、北海道内の8名の独立展会員による新作が展示されました。

出品作家:大地康雄(札幌市)、木村富秋(札幌市)、木村由紀子(札幌市*新会員)、高橋 伸(千歳市)、高橋正敏(苫小牧市)、竹岡羊子(札幌市)、波田浩司(江別市)、輪島進一(函館市)



音の錦絵

— 絵師たちの見た洋楽器 —

会期:2018年8月18日(土)～9月2日(日)

会場:鹿追町民ホール 入場者数:618名

主催:神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会
共催:神田日勝記念美術館・神田日勝記念美術館友の会
後援:鹿追町・鹿追町教育委員会
協力:東京学芸大学附属図書館

東京学芸大学名誉教授・澤崎眞彦氏による浮世絵コレクションを紹介しました。澤崎氏は音楽教育を専門としていることから、江戸後期から明治期に描かれた浮世絵の中でも、画中にアコーディオンやオルガン、ヴァイオリンといった舶来の「洋楽器」が登場する作品を豊富に所蔵しており、本展には澤崎氏の所蔵品に加え、東京学芸大学附属図書館所蔵の3点を加えた全65点が出品されました。



【関連イベント】

澤崎氏によるギャラリー・トーク

日時:8月18日(土)14:00～15:30 参加人数:32名

蒼野甘夏 日本画展

会期:2018年10月16日(火)～10月28日(日)

会場:神田日勝記念美術館

入場者数:676名

主催:神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会
共催:神田日勝記念美術館・神田日勝記念美術館友の会
後援:鹿追町・鹿追町教育委員会

札幌在住の日本画家・蒼野甘夏の十勝初の個展を開催しました。ほとんど独学で日本画の技法を習得し、独自の表現を確立したという点は、神田日勝とも相通じます。本展には、古事記に登場する神々を題材とした《伊邪那岐鬼祓図》・《伊邪那美月読図》のほか、艶やかな女性を描いた《Smoke get in your eyes》、最新作《Smile》など、2016年以降の作品17点が展示されました。



鈴木秀明の世界

会期:2018年5月29日(火)～6月10日(日)

会場:神田日勝記念美術館

入場者数:348名

主催:神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会
共催:神田日勝記念美術館・神田日勝記念美術館友の会
後援:鹿追町・鹿追町教育委員会

具象画壇の登竜門として知られる安井賞展や小磯良平大賞展などで活躍する、新道展の画家・鈴木秀明の作品展を開催しました。その作品群は「古代追想」を基層のテーマとし、画中には古代ギリシャを代表する彫刻や壺絵が引用され、崩れかけた彫刻や建築の一部として登場します。その朽ちゆく姿はある種の終末観を示しますが、元の文脈から切り離され画面上で再編成されることにより、新たな物語の始まりを予感させるものでした。



【関連イベント】

鈴木秀明アーティスト・トーク

日時:6月9日(土)14:00～15:30 参加者数:34名

牛の足音

— 富田美穂 牛の木版画展 —

会期:2018年9月4日(火)～10月14日(日)

会場:神田日勝記念美術館 入場者数:1,757名

主催:神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会
共催:神田日勝記念美術館・神田日勝記念美術館友の会
後援:鹿追町・鹿追町教育委員会

道内でいま最も注目を集める若手作家のひとり、富田美穂の木版画展を開催しました。富田は東京に生まれ、武蔵野美術大学時代の酪農体験をきっかけに、牛に惹かれ、現在はオホーツク海沿岸の小清水町で酪農に従事しながら制作をしています。農業と制作を両立し、牛を画題にその姿を細部まで克明に表現してみせる姿は、神田日勝とも重なり合います。会場には、本展にあわせて制作された幅2.7mの新作『701全身図』のほか25点が展示されました。



【関連イベント】

アーティスト・トーク

日時:①9月15日(土) ②10月14日(日) / いずれも13:30～14:00
参加人数:①71名 ②51名

開館25周年記念展

《室内風景》を巡る、
これまでとこれから より《室内風景》のこれまで
—— 当館企画展での紹介 ——

当館では1993年の開館以来、5年ごとの周年事業において《室内風景》を中心とする特別企画展を開催してまいりました。ここで各展覧会の内容と、それに付随する作品調査活動について振り返ってみたいと思います。

第一弾となった1998年の開館5周年展「室内風景への軌跡」では、1972年の遺作展以来26年ぶり鹿追に《室内風景》が「帰郷」しました。同作を「神田日勝の画業の凝集」と位置付け、《瘦馬》や《壁と顔》など当館初展示となる作品群から、その構図やモチーフ、制作姿勢等が《室内風景》に繋がっていく様子を展観しました。

その後、2001年、2002年には、神田日勝の画友・徳丸滋への聞き取り調査により、画中のテレビ広告の記号が後に手を加えられた(文字が塗りつぶされています)ことや、同作の誕生背景に影響を与えたと考えられる同時代の絵画、海老原暎《1969年3月30日》の存在が明らかになりました。

2003年の開館10周年展「ぼくはここにいる～日常と非日常のはざま」では、人物の背景の新聞にスポットがあたりました。画中の新聞から読み取れる文字情報から、当時の新聞との検証が行われ、記事の多くが虚構のものであることがわかりました。そこから、現実と虚構、日常と非日常の境界を行き来するような絵画観が、神田芸術を捉えるキーワードになることが提示されました。加えて調査の過程では、《室内風景》制作時、作品の支持体であるベニヤ板に直接新聞を画鋏で留め、広告の図様を見ながら描いたという制作状況も明らかになりました。

2008年の開館15周年展「神田日勝の世界」は、《馬(絶筆・未完)》と《室内風景》の邂逅をテーマに、日勝没年に描かれた2点の代表作を同時展示しました。同展では、神田日勝が主たる活動の場とした全道展や独立展といった公募展出品歴が精査され、1960年から1970年までの公募展出品作を中心に、彼の画業を概観しました。

その後2010年には、静岡に海老原暎を訪ね、上記の《1969年3月30日》実地調査が行われました。作品の実見を経て、同作が《室内風景》の図像源となったという見方はより強いものとなりました。



2013年の開館20周年展「室内における人間像～その空間と存在— 神田日勝の『室内風景』の内奥へ—」は、戦後美術の流れから《室内風景》を捉えることを試みるものでした。河原温を中心に、鶴岡政男ら「密室の絵画」の主たる画家との比較から、日勝作品の空間表現の特色を捉え、神田日勝のリアリズムを照射することが目指されました。

こうした活動の流れを踏まえつつ、今年2018年の開館25周年展では、これまで調査が進められてきた海老原暎《1969年3月30日》と《室内風景》との初の比較展示の実現をひとつの目標としました。もうひとつには、画業初期のモノクロームの作品群、そして画業中期のカラフルな作品群から、《室内風景》にいたる流れを見出し展観することを試みました。

神田日勝作品は彼自身の生涯と密接に結び付けられ、彼の実体験や心情を絵画化したものとして見られがちでした。しかしながらここ2年のうちに、《室内風景》以外の作品についても、彼の蔵書やスクラップ・ブックからその図像源が新たに発見され、作品のイメージ形成プロセスが徐々に明らかになり始めています。これまで語られてきた以上に、彼自身は同時代の美術動向に鋭敏に反応しているのです。画家没後50年を目前に、改めてその同時代性を検証し、より広い美術史の流れの中で神田日勝芸術を捉える試みが始まっています。

《室内風景》を巡る、 これまでとこれから

開館25周年記念展

はじめに
本展は、神田日勝の画業の集大成とされる《室内風景》(図1)を巡って、その作品誕生への軌跡や影響関係をたどるとともに、当館25年の歩みを振り返る機会を目的したものです。その試みとして、まずは室内や家屋が描かれた作品の系譜に着目し、画業初期の《家》(1960年)や《飯場の風景》(1963年)から、中期の「画室」連作、そして最晩年の《室内風景》へといたる軌跡を辿ります。

会期:2018年6月12日(火)~9月2日(日)
入場者数:2,857名

主催:神田日勝記念美術館
後援:鹿追町、鹿追町教育委員会、神田日勝記念美術館友の会、鹿追町文化連盟、北海道新聞帯広支社、十勝毎日新聞社、NHK帯広放送局、FM-JAGA、FM WING



図1. 神田日勝《室内風景》1970年 北海道立近代美術館蔵

1 モノクロームの路 板・壁・人物の展開

本展では、神田日勝が家屋や室内を描いた作品を2グループに分け、それぞれが《室内風景》にいたる流れを見出します。まずは、画業初期のモノクロームの作品群です。

平面的な板や壁からドラム缶やゴミ箱が独立し、それらが《板・足・頭》(図2)で人物に変化します。彼らはある種の「閉塞感」を表す人物として描かれていると考えられます。《人》で人物は立像から坐像に変化し、さらに《飯場の風景》(図3)では膝を抱える姿に展開します。室内で膝を抱える人物の姿は、初期作品で成立を見せます。



図2. 神田日勝《板・足・頭》1963年
北海道立近代美術館蔵



図3. 神田日勝《飯場の風景》1963年
当館蔵



図4. 神田日勝《画室A》1966年
当館蔵



図5. 神田日勝《画室E》1967年
北海道立帯広美術館蔵(帯広市より寄託)



図6. 神田日勝
《室内風景》1968年
北海道立近代美術館蔵

2 カラフルの路 「画室」からの展開

もう一つの流れは、新たな絵画様式が試みられた「画室」連作に見出すことが出来ます。

最近の調査研究で、連作の第一作目となる《画室A》(図4)の構図やモチーフは、神田日勝の旧蔵品に含まれる美術雑誌『みづゑ』の写真図版が参考にされている可能性が浮かび上がりました(*1)。これまでに無いほど色とりどりの絵の具で華やかに彩られた室内の風景が展開します。最初の5点は無人のアトリエ風景ですが、その後の1968年の《室内風景》(図6)で、あの特徴的な風貌の人物が登場します。

新聞が画中にモチーフとして登場するのは、《画室E》(図5)が最初となります。次の《室内風景》では人物の足元に新聞が敷かれ、この後、部屋全体にこの新聞が展開していくこととなります。

3 海老原暎と神田日勝

海老原暎《1969年3月30日》(図7)は、前館長の菅によって、《室内風景》の部屋全体を埋め尽くす新聞の表現に影響を与えた可能性が指摘されました。画家が本作の写真図版を美術雑誌で眼にし、その図様を「背景」として取り入れたという指摘です。(P.5『室内風景のこれまで』参照)

《1969年3月30日》は、100号のキャンパスに広げられた新聞が「だまし絵」のように描かれた油彩画です。大量に印刷(複製)、消費される新聞を画題として、それをそっくりそのまま、見出しの文字が読み取れるほど緻密に再現してみせる手法は、ポップ・アートの流れを汲んでいます。作者の海老原暎は1942年東京に生まれ、多摩美術大学を卒業し、27歳の頃に本作を描いています。本作は1970年の「第9回現代日本美術展」出品作であり(*2)、何らかの媒体に掲載された本作の図版を日勝が眼にしていたと考えられます。

両作品の共通点として、互いに絵筆を用い、新聞紙の陰影や活字が描かれています。実は《室内風景》だけが、従来作品とは明確に異なり、画面の大半に絵筆が用いられているのです。一方、絵筆を用いて紙面をリアルに再現してみせる手法は互いに共通していますが、海老原は実物の新聞そのものを描き写したのに対し、《室内風景》の新聞記事は画家が手を加えた、虚構の記事です。神田日勝は、海老原作品の図様を「背景」として取り入れ、情報化社会に生きる現代人の閉塞感や、社会からの孤立感、疎外感を表現するモチーフとして、これらの新聞を描いていると考えられます。



図7.海老原暎《1969年3月30日》1969年 作家蔵



- *1 『みづゑ 第736号』『フォト・インタビュー』山口薫に掲載(1966年6月 美術出版社)
『神田日勝記念美術館だよりNo.35』「調査報告:《画室A》の図像源について」にて報告
- *2 海老原暎の公募展出品状況(1969年~1971年)《内は出品目録に掲載された作品名
1969年 第5回国際青年美術家展(The millors and Chinkes)
1969年 第9回現代日本美術展(1969年3月30日)
1971年 第10回現代日本美術展《ベ・ベ・ベ・ベストル》、《逃げるが勝ち!》
※1971年発売の『現代の美術く5つづかれた自然』(講談社)に《1969年3月30日》のカラー図版が掲載された
「膝を抱える人物像」の起源については、《死馬》のためのデッサン(全26枚)の中に、この人物像が成立する
プロセスを見て取ることが出来る。2016年に行ったデッサン帳、スクラップ・ブックの調査の結果、
人物像の成立プロセスにおいて、同時代の別の画家が描いた絵画(棺の横に座り死者を悼む人物が描かれる)が
参照されていたことが判明した。(下記にて報告)
『片岡球子展 本画とスケッチで探る球子のひみつ展』シンポジウム パネリスト報告②《室内風景》の男は何を
見つめていたか—神田日勝の場合、(『北海道芸術論評』、北海道芸術学会、2018年3月)
- *3

おわりに

従来《室内風景》は彼自身の絵画様式の変遷、その試行錯誤の末に生まれた作品とされてきました。確かに初期、中期の作品群からそれぞれ《室内風景》へといたる流れを見出すことが出来ますが、デッサン帳やスクラップ・ブック、蔵書といった旧蔵品の分析調査により、例えば画業中期の《画室A》の誕生背景や、初期から晩年まで折に触れて描かれる「膝を抱える人物像」の成立背景に、同時代美術からの影響を見出すことが出来ます(*3)。

開館25年の歩みのなかで、これまで知られていなかった神田日勝の創造プロセス、その具体的な手法や元になった絵画(図像源)が徐々に明らかになりつつあります。「天折の農民画家」という画家個人の伝記的な語り口から脱し、同時代の作品や美術動向との結びつきの中で、神田日勝芸術は捉えられねばなりません。

開館25周年記念展 関連イベント

美術講座

日時:2018年7月29日(日)14:00~15:30
会場:鹿追町民ホール ミーティング室
●学芸員による展覧会解説「《室内風景》の語られ方」(30分)
●特別講演 「人物のいる室内空間—ヨーロッパ美術との比較」(60分)
講師:谷古宇 尚 氏(北海道大学大学院文学研究科教授)
参加人数:28名



ギャラリー・ツアー

日時:①2018年6月23日(土) ②8月4日(土)
いずれも14:00~14:30
会場:神田日勝記念美術館展示室
案内:当館学芸員
参加人数:①22名 ②25名



神田日勝記念美術館開館25周年記念事業 絵画感想文コンクール

2018年10月2日(火)～10月9日(火)
鹿追町民ホール

応募点数
321点

小学生の部 〈応募数85点〉

■最優秀賞

前田 冬芽
七飯町立大中山小学校 2年

■優秀賞

山崎いろは
鹿追町立瓜幕小学校 6年

伊藤 晏理
札幌市立伏見小学校 2年

■入選

阿彦 美歌
鹿追町立鹿追小学校 6年

正保 みわ
鹿追町立瓜幕小学校 6年

竹俣 明花里
鹿追町立上幌内小学校 6年

椿 葵
鹿追町立笹川小学校 6年

竹嶋 沙織
千歳市立東小学校 5年

狩野 凜心
鹿追町立瓜幕小学校 3年

中学生・高校生の部 〈応募数225点〉

■最優秀賞

牧田 早加
北海道池田高等学校 2年

■優秀賞

山崎 愛歌
北海道教育大学附属釧路中学校 2年

今 佑月
千歳市立東千歳中学校 1年

■入選

西村 知華
北海道鹿追高等学校 2年

上村 汐織
北海道鹿追高等学校 2年

瀧澤 美空
北海道池田高等学校 2年

相川 琉稀
北海道池田高等学校 2年

砂田 杏花
北海道教育大学附属釧路中学校 2年

世戸 沙苗
小樽市立朝里中学校 2年

一般・学生の部 〈応募数11点〉

■最優秀賞

後藤 夏江/函館市

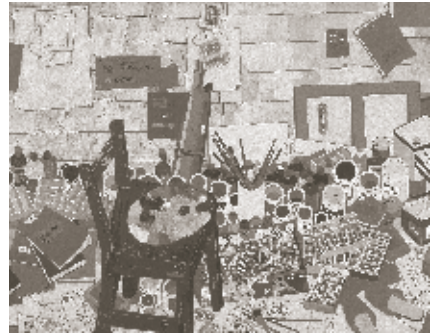
■優秀賞

岡田 渉/神奈川県川崎市

■入選

前田 英伸/鹿追町
田和 輝起/帯広市

題材画：《画室B》



神田日勝《画室B》1966年 当館蔵

《最優秀賞作品》

一般の部 「画室の主～迷いと可能性」
函館市 後藤 夏江

この絵、嫌いじゃない。
「画室B」を初めてみたときに、私はそう思った。
散らかっている部屋が落ち着く人なのだろうか。
それとも、片付けるひまがない人なのだろうか。
画室の主に思いをはせる。
いろいろなものが見えてくる。

スケッチブック。絵具。絵筆。空き箱。
クレヨンなのか、パステルなのか、箱に入った小さな棒状のもの。
束ねられた紙のようなもの。
便箋。封筒。床に置かれた白いキャンパス。
壁に貼られた白い紙。
壁にも色がついている。
モンドリアンの絵のような、スーラの点描のような。

画室の主の目には何が映っているんだろう。

私がこの絵を眺めるうちに目を奪われていったのは、あざやかな色彩だった。
たくさんの色が、いろんな形で散らばっている。
色を投じるための絵筆でさえ、持ち手に赤や、青といった色が与えられている。

白い紙には可能性。
色には迷い。
迷いに迷いながら、白い紙の上に色を置き、それが形をつくり、絵になっていくの
のだろう。
迷っているばかりではだめだ。
どんな色を置くか、決定すれば、そこから可能性が生まれる。
眺めれば眺めるほど、発見がある。
紺色に塗られた木の椅子に、パレット。
小さな宇宙と星雲にも見える。
ここにも果てしない可能性を感じる。

自分を表現できる手段を持っているから、迷いに迷えるのかもしれない。
最後には自分にとっての正解を確実に選べるから、自信をもって迷えるのかも
しれない。

この画室に、もし風が吹き込んだら、画室中の紙という紙が、色を乗せて部屋中
を飛び立っていくのかもしれない。
スケッチブックの1ページ1ページや、壁に重ねて貼られた白い紙の、隠れて見
えない部分から、どんな色が現れるのであろう。

画室の主は、神田日勝の作品を通じて自分に向き合う、私自身のように思えて
きた。
神田日勝は私に、自分で選んで自分らしく生き、自分の可能性を信じてあきら
めないことを教えてくれているような気がする。
自分でもまだ気がついていない、可能性があることも。
床に散らばった封筒と便箋は、そんな私を励ます日勝からの手紙のようだ。
「画室B」、この絵が好きになった。

《最優秀賞作品》

小学生の部 「画室Bを見て」
七飯町立大中山小学校 2年 前田 冬芽

「わっ！！お母さんに、おこられちゃうぐちゃぐちゃなへやだ。」
はじめは、とてもちがった、きたないへやに見えました。でもよく見ると、
ちがっているだけじゃなくて、絵のぐも、ふでもまとめてあって、いろいろな
ものがたくさんおいてある、絵をかくのが大らかな人のへやだとわかりました。
そしてぼくは、この絵を見て、「どんな色が好き」と言う歌を、思い出しまし
た。なぜその歌を思い出したかと言うと、たくさんの色がかかっている、ほう
石ばこのように見えて、ぜんぶの色が好きと言う気持ちが、つまっているのか
なとかんじました。
この絵の、一ばん好きなところは、たくさんのものに文字がかかっている
ところ。ぼくがまねをしてかいても、こんなにうまくかくことはできません。
絵をかく時は、好きなものをかきます。だからきつと、絵をかくのが好きで、
絵をかくどうぐのことも、大すきで大せつに思っているんだと気づきました。
そう思って、絵を見るとはじめに思ったことと、ぜんぜんちがう絵に見えて
きて、絵のどうぐとへやに、ありがたうを思っていたんだと、あたたかい気
もちになりました。ぼくも人にあたたかい気もちや、すごいなと思ってもらえ
る絵をかいてみたいなと思いました。

《最優秀賞作品》

中学生
高校生の部 「この部屋の表すこと」
北海道池田高等学校 2年 牧田 早加

私はこの絵を見て、奥が深そうだと感じました。一見、明るい色の部屋で美
術家が作品を作っている様子にみえますが、実際そんな単純なものではない
と思いました。なぜならこの部屋には絵の具や筆など美術家らしいもののほかに、
はがきやスリッパなど日常生活でよくあるものも置いてあり、この部屋の
主の生活の一部であると思いました。
私はこの絵を人の心情と照らし合わせてみました。たくさんのものが散ら
かっているのは、悲しみや喜びなどいろいろな気持ちが入り混じっている
という風であり、いろいろな色の絵の具は、自分がどんな道に進もうか迷って
いる様子であると感じました。また、一番目を引く青色の椅子は、少しぼろぼ
ろに見えることから疲れている気持ちが色のむらやばげていることを通して伝
わってくると感じました。そして、床にある生活の品々から、それらの感情が
日常生活と大きくかかっていると感じました。
私ははじめこの絵を見たとき、単純にきれいだとか、明るいと思いました。
しかし、じっくりと見てみると、その明るさの中にもどこか疲れや悲しみが感
じられる表現を見せていて、絵とはそれぞれによって感じ方がばらばらにあり
非常に面白いものだ今回の鑑賞を通して思いました。きっと今の私の気持
ちもこの絵に似た、散らかっている部屋のようになっているの、少しずつ整
理していこうと思いました。

第24回 馬の絵作品展

2018年10月2日(火)～10月9日(火) 鹿追町民ホール

応募点数
734点



作品全体では描いた馬の姿に躍動感があり構図、彩色等優れたものが多くなりました。背景は風景や人を上手に取り入れ工夫されています。また、人と馬の触れ合う温かい作品が目にとまりました。馬の世話をする経験を描いたり、馬をシルエット(影)で表現する等、大変力作が多くじっくりと時間をかけ丁寧に仕上げる意欲と根気に驚いています。学校全体で取り組まれているところもあり、その努力に報いたいものです。次年度も全国各地から数多くの応募作品をお待ちしております。

(齊藤隆博審査委員長 講評より一部抜粋)

表彰式

2018年10月6日(土)

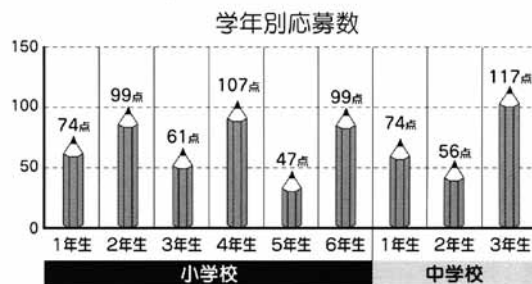
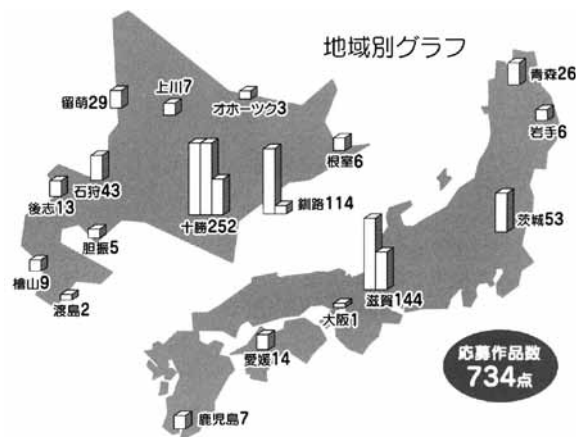
馬の絵作品展と絵画感想文コンクール合同で行われたため、会場は受賞者と、その連れ姿を見に来た家族で満員となりました。受賞者は慣れない雰囲気緊張した面持ちでしたが、誇らしげに賞状を受け取っていました。



文部科学大臣賞
苫前町立苫前中学校 3年
加賀谷 柗次

《入賞》

- 文部科学大臣賞
加賀谷柗次 苫前町立苫前中学校 3年
- 北海道知事賞
上田明奏羽 北海道教育大学附属釧路中学校 2年
- 北海道教育委員会教育長賞
野村 英春 増毛町立増毛小学校 6年
- 鹿追町長賞
安藤知佐都 苫前町立古丹別中学校 2年
- 鹿追町教育委員会教育長賞
松原 美桜 千歳市立泉沢小学校 5年
- 神田日勝記念美術館長賞
吉本 萌夏 中標津町立計根別学園 4年
- 北海道新聞社賞
阿部 晃大 釧路市立湖畔小学校 2年
- 十勝造形サークル委員長賞
渡辺 耕大 甲賀市立甲南第一小学校(滋賀県) 3年
- 帯広市教育研究会図工美術部会長賞
丸山 泉 帯石町立帯石中学校(岩手県) 1年
- JR北海道社長賞
及川 那月 八戸市立明治中学校(青森県) 1年
- 北海道電力(株)送配電カンパニー帯広支店長賞
一森 彩雪 釧路市立鳥取中学校 3年
- 帯広信用金庫理事長賞
豊川 ねね 別海町立別海中央小学校 1年
- 学校賞
千歳市立東千歳中学校



馬の絵写生会

2018年7月28日(金)
鹿追町ライディングパーク
参加人数:22名

講師/ 和田仁智義氏
(平原社展事務局長)
内藤 智香氏
(上幌内小学校)

町内施設で本物の馬を間近に見ながら「馬の絵作品展」に向けての写生会を行いました。動いている馬を描くことの難しさに苦戦しつつも、講師の先生にアドバイスを受けながらしっかりと馬の顔つき、身体つきの特徴を捉え、馬の絵を描き上げることが出来ました。

合間に乗馬体験を行い、より馬を身近に感じて表現へと繋がられる機会を設けました。



子どもワークショップ

夏

子ども芸術鑑賞ツアー & 夏休み子どもワークショップ

2018年8月1日(水)
●北海道立帯広美術館・帯広百年記念館
WS 講師/森 久大 氏(帯広百年記念館学芸員)
参加人数:30名

北海道立帯広美術館で開催された「魔法の美術館」展を鑑賞し、来場者の動きに合わせて変化する、映像や音の「体感型アート」を体験しました。その後、帯広百年記念館に足を運び、森学芸員の案内で同館の展示を鑑賞しました。今回は夏休み子どもワークショップの出張版として、同館での火おこし体験プログラムに挑戦しました。



冬

冬休み子どもワークショップ 「イノシシの箸置きを作ろう！」

2019年1月11日(金)
●鹿追町民ホール
講師/三上 慶耀 氏(日本工芸会)
江口 敬生 氏(陶芸工作館職員)
参加人数:16名

今年の干支「亥」(イノシシ)にちなみ、鹿追焼きの箸置きを作りました。粘土を丸めるところからスタートし、のし棒を使って粘土を楕円反型に形成し、最後は真剣な面持ちで顔や毛並みの絵付けに挑戦しました。



春

春休み子どもワークショップ 「世界でたった1つのランプシェードを作ろう！」

2019年3月28日(木)
●鹿追町民ホール
講師/伊藤 明美 氏(キッズ・ボランティア)
参加人数:16名

今年は「折り染め」に挑戦してランプシェードを制作しました。折り染めは折った和紙に染料を浸して、開いた時に柄が出来る仕組みになっています。和紙の折り方や色の組み合わせにより様々な絵柄が現れ、参加者の工夫や個性が発揮されました。



アート・キッズ・クラブ

- ①モール工作を楽しもう！ ●2018年5月19日(土) ●鹿追町民ホール 参加人数:23名
- ②カイト(凧)を作って飛ばそう！ ●2018年7月21日(土) ●鹿追町民ホール 参加人数:25名
- ③回転のぞき絵を作ろう！ (かたんソートローブ) ●2018年12月22日(土) ●鹿追町民ホール 参加人数:18名
- ④キラキラ☆ミサンガを作ろう！ ●2019年2月16日(土) ●鹿追町民ホール 参加人数:22名



全4回のプログラムを実施しました。事業を通して子どもたちからは創意工夫する喜びや楽しさを感ずる様子うかがえました。



水彩画教室

- 2019年 ①2月21日(木) ②2月25日(月)
③3月14日(木) ④3月25日(月)
- 神田日勝記念美術館
講師/高橋 幸男 氏(ジョナサン絵画教室)
参加人数:①3名 ②6名 ③1名 ④2名



2月と3月に計4回の水彩画教室が開催されました。果物や野菜、植物、魚、硝子瓶、パンやお菓子などから絵のモチーフを選び、「見たまま感じたまま」を心がけて静物画に挑戦。「他人と比較せず、楽しみながら絵を描くことが上達の秘訣」と言う高橋先生の教えのもと、対象をより正確に捉える方法や絵具の使い方、色の選び方についてアドバイスを受けながら、思い思いに描き上げました。



出前講座

- 2018年5月22日(水)
- 鹿追町立瓜幕中学校
中学1年生/10名



神田日勝の生涯と代表作をスライドで紹介したのち、秋の「馬の絵作品展」にむけて、同展の歴代上位入賞作を見ながら、構図や色彩の独創的な表現を学びました。

北海道150年事業 アートギャラリー北海道 神田日勝と道東の画家たち



会期:2018年9月15日(土)~12月14日(金)
主催/会場:北海道立帯広美術館 ●入場者数:4,183名

協力:神田日勝記念美術館 特別協賛:帯広信用金庫、帯広大谷短期大学
協賛:東北海道日野自動車株式会社、北海道クリーンシステム株式会社帯広支店、
FLOWMOTION café and gallery

今年度より始動した「北海道150年事業 アートギャラリー北海道」の一環として、当館と北海道立帯広美術館との相互連携による企画展「神田日勝と道東の画家たち」が開催されました。本展には、当館収蔵品の中から、神田日勝《ゴミ箱》(1961年)を始めとする神田日勝の油彩画15点と、同時代の道東の画家達の作品13点、計28点が出品されました。

本展開幕に先駆け、6月から、同館ロビーでの「馬の絵作品展」サテライト展示、および両館入場料相互割引が開始しました。(※相互割引は来年度以降も継続します)



感想ノートより

「幸福の手紙」にここが出てきます。作者の内田康夫先生が今年亡くなられたので、作者のファン7人で訪れました。本物の迫り来る毛並みに心震えました。

2018.7.6
(愛知、東京、山口、栃木)

東京から毎年来ています。
上野や横浜の数々の美術館よりもここはお気に入りの美術館です。
もっと日本中の人達に神田日勝を知ってほしい。
Aug.10th.2018

わたしが見た絵の中で、きにいったのは、「みかんの馬」です。なぜなら、かなしい目と、大きい体、1本の色などは、よく見ると、いろいろな色がはいていたからです。

8月

私が中学生の頃、帯広の広小路?に小さな画廊があって母と初めて見たのが神田日勝さんの絵画でした。
新聞の文章まで描いてあって衝撃を受けた事、今でも心に残っています。一中には武田先生が美術を教えていて、この2人の影響で美術部にも入りました。
ずっと来たかったこの美術館にやって来れたね。感無量です。又来たいです。

8/12

これで4回来ました。何度見せて頂いても、一生懸命に生きぬいた日勝さんには感動しかありません。
生存されていたらしゃれば、私の兄の様な年代、そして酪農家の私には、初期の酪農風景がなつかしくも苦しい思いです。
又、逢いに来ます。

2018.12.18
江別より

開館25周年
記念展

音声ガイドの作成



協力先:帯広大谷高校放送局

弥永桃奈さん(3年)、大竹香苗さん(3年)、大矢玲奈さん(3年)
中橋響希さん(3年)、本庄ヒカリさん(3年)、渡邊実乃里さん(2年)
高橋映光さん(2年) / 放送局顧問:小玉紘史教諭

「開館25周年記念展 —《室内風景》を巡る、これまでとこれから」の音声ガイド作成にあたり、帯広大谷高校放送局に音声の吹込みを依頼しました。事前に美術館で解説対象の作品や会場を下見し、打ち合わせしたのち、約一か月の練習期間を経て本番の音声を吹き込んでくれています。聞き取りやすく、みずみずしい声が来場者の方々にも好評でした。

※音声ガイド作成後、本庄さんと渡邊さんがNHK杯全国高校放送コンテストに出場され、本庄さんが朗読部門で全国入選という優秀な成績を収められました。さらに、2年生の高橋さんが中心となり秋の企画展「牛の足音—富田美穂 牛の木版画展」を題材に番組「牛の足跡」を制作し、高文連全道大会ビデオメッセージ部門で優良賞を受賞されました。



事前打ち合わせの様子



書籍紹介

BOOKS INFORMATION

『暮しの手帖 96』 〈10-11月号〉

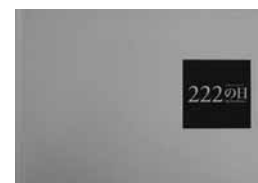
岡本仁さんによる連載「今日の買い物」でご紹介いただきました。
(岡本仁「第41回 十勝へ—未完の馬。」)



発行日/2018年9月25日
発行/株式会社暮しの手帖社

池田 緑『222の日』

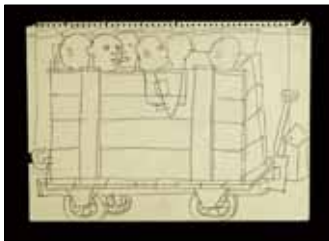
池田氏による十勝毎日新聞「編集余録」(2012年8月~2017年5月分)全222編が収録されています。「半身の馬」(2013.9.6)、「菅調章さん」(2016.1.15.)で取り上げていただきました。



発行日/2018年5月31日

新収蔵品 紹介

作品所蔵者のご厚意により、平成30年度には神田日勝のデッサン1点が寄贈され、油彩画15点が寄託されました。



寄贈作品

《炭車・人》1963年頃
鉛筆、紙 25.3×35.0cm
橋 陶氏(函館市)より寄贈

寄託作品



《風景》1968年頃 佐野力氏蔵
油彩、キャンパス 22.2×27.6cm



《雪の農場》1969年 佐野力氏蔵
油彩、キャンパス 24.4×23.5cm



《湿原》1969年 佐野力氏蔵
油彩、キャンパス 32.2×41.2cm



《扇ヶ原展望》1969年 佐野力氏蔵
油彩、キャンパス 45.5×52.9cm



《静物》1966年 佐野力氏蔵
油彩、ベニヤ 32.3×41.2cm



《農場》1966年
油彩、ベニヤ 53.0×65.2cm



《風景》1968年
油彩、キャンパス 45.5×57.7cm



《農道》1969年
油彩、キャンパス 13.3×17.7cm



《ポプラの道》1969年
油彩、キャンパス 53.0×65.2cm



《ポプラの道》1968年
油彩、キャンパス 31.3×40.4cm



《暮色》1969年
油彩、キャンパス 24.0×33.3cm



《風景》1966年頃
油彩、ベニヤ 37.9×45.5cm



《風景》1968年
油彩、キャンパス 33.4×24.3cm



《風景》1968年
油彩、キャンパス 36.2×21.0cm

NHK朝の連続テレビ小説第100作目となる『なつぞら』が4月1日より放送開始



◆主人公「なつ(演: 広瀬すず)」は戦後に、亡くなった父の戦友に引き取られ、北海道・十勝へ移り住みます。そこでなつに絵心を教えるのが、ベニヤ板に素敵な馬の絵を描く少年「山田天陽(演: 吉沢亮)」です。その後なつは上京し、草創期を迎えていたアニメ業界に飛び込むというストーリーが展開されます。

◆山田天陽は、今作品の脚本を手掛ける大森寿美男氏が鹿追町まで出向いて、神田日勝をモチーフに作り上げた役柄です。なつの今後の人生に大きな影響を与え、物語の根幹となる出来事のキーマンでもあります。

◆昨年の12月には吉沢亮さんが来館されたこともあり、当館としても大注目の作品です。

4月からは「なつぞら」。ぜひご覧ください！

当館で公式グッズを取り扱っています。

開館25周年記念

『神田日勝作品集』発刊



税込¥2,500

当館開館25周年記念事業として、神田日勝の作品を全て画像付で掲載した『神田日勝作品集』を発刊いたしました。本図録は、神田日勝の作品として現在確認しうる全ての作品を網羅することを目指したもので、435点にのぼる本画とデッサンが収録されています。

神田日勝記念美術館×柳月

「日勝 鹿追アートビスキュイ」 限定販売開始！

約10年前、柳月とのコラボレーションで制作したクッキーが、装いも新たに帰ってきました。クッキーそのものはもちろん、箱・個装ともに一新。おいしさも更にアップ！

しかし、時が経っても変わらないのが、永久に完成しない《馬(絶筆・未完)》のモチーフ。そして職人の情熱です。時代の移り変わりにあわせて変わるもの、変わらないもの、全てが詰まった「日勝 鹿追アートビスキュイ」。ぜひご賞味下さい。

現在、全道の柳月各店舗およびインターネットで販売しておりますが、当館でも4月から販売を開始します。一年間限定販売となりますので、話題のひとつとしてお買い求めいただければ幸いです。

